

# 偶然できた形から表したいことを見付け、

## 表現を工夫して絵に表す学習

～1年「やぶいた かたちから うまれたよ」の実践を通して～

盛永枝里

### I はじめに

図画工作科における主体的・対話的で深い学びの実現に向けては、「造形的な見方・考え方」を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させながら育成することが重要であるとされている。

これまでの広く一般的な図画工作科の学習では「創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること」「生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的に関わっていく態度を育むこと」についての成果が挙げられる一方、課題として「感性や想像力等を豊かに働かせて、思考・判断し、表現したり鑑賞したりするなどの資質・能力を相互に関連させながら育成することや、生活や社会と豊かに関わる態度を育成すること」が挙げられている。自分がイメージするものを具体化するために基礎的な技能を使い、そこに自分なりの意味や価値をつくりだすことが大切になる。

そこで図画工作科2年次のテーマを「造形的な見方・考え方を生かして、発想を豊かにする造形活動づくり」と設定した。自分の活動について価値を見いだすための発想を広げる造形活動の在り方を明らかにし、造形的な見方・考え方を生かしながら豊かな発想を引き出す造形活動づくりを目指した。本研究の3年間で表現と鑑賞の資質・能力をどのように相互に関連させて児童の造形的な見方・考え方を伸ばしていくのかについて明らかにしていきたい。



何に見立てられるかクイズを出し合う児童の姿

### II 研究の目的と方法

本研究の目的は、児童が発想を豊かに表現するための造形活動づくりの手立てを明らかにすることである。そのために、以下の3つの視点から、授業実践「やぶいた かたちから うまれたよ」における児童の様子について分析する。

- ① 造形的な見方・考え方を伸ばす指導計画
- ② 発想を広げる活動の工夫と充実
- ③ 自己の表現の価値を広げる評価の工夫

なお、研究の対象とした単元の概要は以下のとおりである。

#### 1 題材名 「やぶいた かたちから うまれたよ」

#### 2 題材の目標

破いた紙の形から表したいことを見付け、想像を膨らませて表したり、表し方を工夫したりする。

#### 3 題材の概要

破いた紙の形で偶然にできた形からイメージを膨らませて形を組み合わせたり、絵をかき加えたりしながら作りたいものを表していく題材である。

偶然できた形を何かに見立てることが難しい児童がいるという児童の実態から、「見立てる」ための視点を児童にもたせるために試しの活動を行った。全員が同じ材料を使っても様々な作品ができたのはなぜなのかを造形的な視点から捉え、全体で共有を図った。

表現活動では、偶然できた形に着目して見立てる活動をするため、紙を破る活動と見立てる活動を分けて行った。また、見立てや表現をしている途中でお互いの行為や表現を見合う場を設定することで、自分とは違うやり方や考え方を自分の表現に生かすことができるようにした。

### Ⅲ 結果と考察

#### 1 造形的な見方・考え方を伸ばす指導計画

##### (1) 結果

本実践では、児童が無意識に使っている造形的な視点を改めて言葉にし、使いながら子供たち自身の経験として取り入れられるように指導を試みた。

試しの活動では、丸や四角など、全員に同じ色・形・大きさの色紙を渡し、それらを使って何に見立てられるのかを考え、表現をさせた。できた作品を鑑賞するときに、「同じ紙を使ったのに、色々なものができているね。なぜだろう」と問い掛け、自分たちの表現の特徴を言葉で表すよう促した。初めは、「みんなそれぞれ知ってることが違うから色々な絵ができる」と表現の多様さに着目した発言が出された。その後、作品を並べたり、同じ色紙に注目し、じっくり見比べたりすると、「三角をこっちは屋根にしているけどこっちは魚の顔にしている」「同じ家を作ってるけど使っている紙が違うから高さが違う」「紙の上に違う紙を重ねたよ」「どっちも顔を作ってるけど違う顔に見える」と、色紙をどのように画面に置いて使っているのかに着目し始めた。



写真1 試しの活動でつくった表現

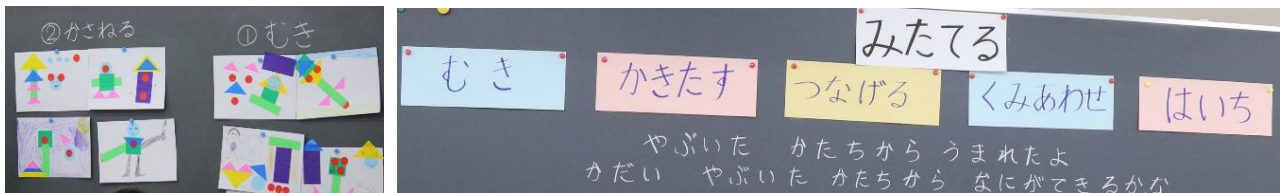



写真2 見立てるために使った造形的な視点

そこで、児童の気づきを短いキーワードにして、見立てるときにどのような方法を使うとよいのかを全体で共有した。破いて偶然できた形を見立てて絵にする活動では、試しの活動では見立てられないと言っていた児童が、紙を回しながら考えたり、つくりたいものを表すためにかき足すか、つなげるか、重ねるかを考えたりする姿が見られた。すでに見立てる活動ができていた児童も、紙をドアのように貼って平面作品だが立体的なものとして見立てたり、画用紙から少しはみ出してついたり、試しの活動で面白いと思ったことを自分の作品に取り入れる姿が見られるようになった。

題材の事後調査において、題材を通して見立てる活動が以前よりできるようになったと思うかを調べたところ、以下のような結果になった。

|                                  |  |              |              |             |            |
|----------------------------------|--|--------------|--------------|-------------|------------|
| 前よりも色々なものに「見立てる」ことができるようになったと思う。 | このかたちが何かに見えますか。<br> | 回答あり         |              | 回答なし        |            |
|                                  |  | 事前           | 事後           | 事前          | 事後         |
|                                  |  | 28人<br>(78%) | 33人<br>(92%) | 8人<br>(22%) | 3人<br>(8%) |

事後調査の結果と事前調査との比較

##### (2) 考察

無意識に使っている造形的な視点を言語化し、意識させるためには、あえて制限された材料を使い、造形的な視点に気づきやすい状況をつくるのが有効だと感じた。本実践の試しの活動では、回すことで違うものに見立てやすい形の紙や、大きさの違う同じ形の紙、複数の同じ形・大きさの紙など形を制限した材料を用意しておき、こちらがねらう造形的な視点を使った絵に表現しやすい環境を整えたことで、児童が形に注目することができたと考えられる。

また、造形的な視点を共有することで、見立て方を知り、偶然できた形を見たとき、自分のつくりたいものを一人一人が考え、表現することができたと考えられる。試しの活動で「何にも見えない。見立てられない。」と言っていた児童が見立てる活動ができるようになったのは、どのように見立てればよいのかが分かったことや、見通しをもつことができたからだと考えられる。造形活動の経験が少ない児童や苦手意識をもっている児童に対して、活動の見通しをもたせることは、安心して活動に取り組むことにつながると感じた。また、すでに見立てる活動ができていた児童にとっても、「こんなことをしてもいいんだ」という新たな発見となり、豊かな表現につながっていたと考える。

## 2 発想を広げる活動の工夫と充実

### (1) 結果

試しの活動では、作品を見比べることで、児童は同じ材料でも多様な表現があることに気付いていた。見立てる活動をするときに、何に見えるのかクイズを出し合う機会を設定することで、児童は相手の出した問題に答えながら「私にもそう見える」と共感したり「でもひっくり返したらこうも見えるよ」と自分の感じたことを相手に伝えたりするなど、遊びながら友達と意見を交流していた。

また、破った紙をグループで共有して使うこととし、互いの活動を見合うことができるようにした。その結果「これは〇〇じゃない？」と友達同士で見立てたものを交流する姿が見られた。



写真3 友達同士で行為を見合う児童の姿

### (2) 考察

本実践では、作品を見比べたり、友達と活動を見合ったりする活動や材料の共有化を行うことで、自分とは違う表現を取り入れ、発想を広げられるようにすることを目指した。

試しの活動で作った作品を見合うことで造形的な視点に児童自らが気付き、新たな表現を自分の作品に取り入れることにつながった。

また、材料を共有して活動を進めることで、友達と見立てを話しながら材料を探したり、自分が見ていた材料を友達がどんなふうに使ったのかを見たりすることができていた。自分がどんなものを作っているのか相手に伝え、共感し合う中で、自分の表現のよさや面白さに気付き、自らの作品を価値づけることにもつながっていると感じた。

作品や活動を見合うことを通して、自分とは違う表現を取り入れることができていたことから、見合う活動は発想を広げるための手立てとして効果的である。

## 3 自己の表現の価値を広げる評価の工夫

### (1) 結果

活動中の児童の姿を見取るため、表現に関わる資質・能力を発揮している児童の姿を『「置き方」「重ね方」「組み合わせ方」などの造形的な視点をを用いて見立てる活動を行っている姿』や『自分が表したいものや思いついたストーリーを言葉で表している姿』など、具体的に設定し、活動の中でどのような造形的な視点をを用いているか、児童のつぶやきからわかる作品の意図、児童の作品がどのように変わっていったかに注目した。

試しの活動で「見立てられない」と言っていた児童が紙を回しながら考えている姿からは、造形的な視点をを用いて活動をしていることが見て取れた。砂漠の世界を作っていた児童は「サボテ

ンもいいかな」「さそりが隠れてるんだ」とつぶやき、自分の表したい世界をイメージしながら表現していく姿が見られた。また、最初クーピーでかいた上から別の紙を貼り、つくり変えている児童からは自分の作品を鑑賞しながらよりよい表現を模索している姿として見取った。

## (2) 考察

表現に関わる資質・能力を発揮している児童の姿を教師が具体的に設定しイメージすることで、どのような場面でどんな姿を見取るのかという視点を明確にして押さえておくことができ、見取りやすくなった。

児童の資質・能力を正しく評価するためには、児童の意図や作品がどのように変わっていったのかについての記録を蓄積していくことが大切になると考える。記録の蓄積方法について、これからも研究を続けていきたいと考える。

## IV まとめ

本研究では、造形的な見方・考え方を生かして、自らの行為や作品を価値付けるために効果的な手立てについて明らかにすることを試みた。そのために、「造形的な見方・考え方を伸ばす指導計画」「発想を広げる活動の工夫と充実」「自己の表現の価値を広げる評価の工夫」の3点について、「やぶいた かたちから うまれたよ」の実践を基に論を展開した。以下に、成果と課題を示す。

### 1 成果

- 制限した材料を用いた試しの活動を設定し、作品を見比べる中で視点を全員で共有したことにより、無意識に使っている造形的な視点に改めて着目して自らの表現に生かすことができた。特に表現に自信がない児童や、どうやって取り組んでよいのか分からない児童にとっては、造形的な視点を手掛かりに活動を進め、自分が表したいものを見付けることにつながった。
- 形が何に見えるかクイズを出し合う活動や材料の共有、作品を見比べることを通して、児童の中で対話が生まれ、友達の考えに触れることによって自分の考えを広げることができた。
- 表現に関わる資質・能力を発揮している児童の姿を設定することで、児童が資質・能力を発揮している姿を見取りやすくなった。

### 2 課題

- 何に着目して互いの行為や作品を見るのかという視点や、見て感じたものをどのように自分の作品に生かしていけばいいのかということを児童に提示する必要がある。
- 1時間の中で児童の活動や考えていることがどのように変わっていったのかを記録する手立てが必要である。記録の蓄積方法について、実践を積み重ねる必要がある。

## V 参考文献

- 評価基準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料  
国立教育政策研究所 教育課程研究センター 教育出版 平成23年11月
- 教育課程部会 芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて（報告）  
中央教育審議会 平成28年08月
- 成長する授業—子供と教師をつなぐ図画工作 岡田京子 東洋館出版 平成28年12月
- 「資質・能力」を育成する図工科授業モデル 笠雷太 学事出版 平成29年3月
- 小学校学習指導要領 文部科学省 東洋館出版 平成29年7月
- 小学校学習指導要領解説 総則編 文部科学省 東洋館出版 平成29年7月
- 小学校学習指導要領解説 図画工作編 文部科学省 東洋館出版 平成29年7月
- よくわかる図画工作科なっとく新学習指導要領授業への生かし方 開隆堂 平成29年11月